宋詞研究

唐五代北宋篇

村上哲見著

村上哲見著

〔東洋學叢書〕

宋詞研究

唐五代北宋篇

刊行 創文社

村上　哲見（むらかみ・てつみ）
1930年大連市に生まれる．1953年京都大學文學部（中國文學專攻）卒業．京都教育大學，奈良女子大學などを經て，現在東北大學文學部教授．1972年日本中國學會賞受賞．1974年文學博士（京都大學）．
〔著書〕『李煜』（岩波書店，中國詩人選集第16卷）『三體詩』上・下（朝日新聞社，新訂中國古典選第16，17卷）『宋詞』（筑摩書房，中國詩文選第21卷）．『科學の話』（講談社）『陸游』（集英社，中國の詩人第12卷）

〔宋詞研究〕

昭和五一年三月二〇日　第一刷發行
昭和六一年二月一〇日　第二刷發行

定價七〇〇〇圓

著者　村上哲見

發行者　久保井理津男
東京都千代田區一番町一七―三

印刷者　山田隆
東京都青梅市根ケ布一―三八五

發行所　株式會社　創文社
東京都千代田區一番町一七番地
〒102　電話東京二六三―七一〇一（代表）
振替　東京二―九二四七二

精興社印刷・橋本製本　　3398-192120-4226

自序

本書の内容の主要部分は、「北宋詞研究」と題して京都大學に提出し、一九七四年二月に文學博士の學位を授與されたものであり、その他の部分（附論等）は、その際に參考論文として併せ提出したものである。その雙方を含めて各章節は、かつて種々の機會に發表した小論文を基礎としたものが少なからず含まれており、本書は私のこの方面に關するこれまでの研究を集約したものといってよい。

かえりみれば、私が京都大學文學部を卒業して大學院に留まることになったのは一九五三年であったが、その時に提出した研究題目は「唐宋韻文文學研究」というものであった。傳統的な「詩詞」という呼び方を避けて、ことさらに「韻文文學」と稱したについては私なりに考えるところがあり、詩と詞とを別個の文學樣式とする傳統的な認識をそのままに受け容れ、これを綜合的に把握する視點を缺いている、少なくともそのようにみえる從來の研究に不滿を感じたからで、詩と詞とを一語で表わすことばを求めた結果この題目となったのである。唐宋の人々が詩詞によって表現しようとしたものを、その精神の內面にたち入って考えてみるならば、全く同一というと語弊があるが決して別々のものではなく、それゆえにこの二つの樣式によって表現された詩的世界も、決して切り離して考え得るものではあるまい、從ってそれらを解明するには、この兩者を綜合的にとらえる視點がなければならぬ、というのが私の研究の出發點における基本的發想であり、その考え方は現在でもさほど變ってはいない。

しかしその後研究を進めて行くにつれ、次第に詞の方に力點をおくようになった。それは、從來のわが國にお

ける中國文學研究の實情をみるに、唐宋の詩に關する研究の厖大な堆積に對し、詞の研究が餘りに乏しく、ほとんど缺落している部分といってもよいような狀態であったからにほかならない。また中華本國においてはさすがに詞についても巨大な研究の蓄積があり、本書に示されるようにその恩恵を蒙ること少なからぬものがあったが、右に述べたような發想からする問題意識に應えてくれるようなものは極めて乏しかった。

そのようなわけで本書はほとんどもっぱら詞を對象とするものとなったのであるが、とはいえ、當初に据えた視點を常に失ってはいないつもりである。例えば溫飛卿の章にみられるように、詞を詩との關連において、むしろその間の脈絡を手がかりとして論じた部分が少なくないし、更に序論においては、詩と詞との差違をどのように考えるべきかという問題にかなりの紙數を費やしたが、これにしても、詩と詞とが根底においてつながっているものと考えるからこそ深刻な問題となるのであり、もともと別個のもの、切り離して考え得るものとするならば、問題設定そのものが無意味となるであろう。そして本書のそうした問題設定や論じ方が無意味なものであったかどうかは、讀者諸賢の判斷に委ねるほかはない。

本書は唐より北宋末に至るまでの詞を主たる對象として種々の問題を論じたが、その範圍においてすら、なお說いて盡くさざるところ、說き及ばざるところは限りない。當初は、右に述べたような發想を根底におき、あらゆる韻文樣式を綜合的にとらえる、すなわち中國文學史の重要な部分を構成するさまざまな韻文樣式を、單に竝列的に記述するのではなく、その間縱橫の有機的なつながりをも解明するような韻文文學史をまとめたいと考えていたし、氣取っていえば本書もその一部にすぎないということになるのであるが、その夢はあまりに大きく、今となっては、とにかくできるところまでやってみようというのが素朴な僞らぬ心境である。

些々たる一本とはいえ、非才の私が本書を成し得たのは、ひとえに數多くの方々の學恩による。まず吉川幸次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

郎、小川環樹両先生には、京都大學入學以來現在に至るまで一貫して懇篤なる御指導を辱うし、ついで入矢義高、田中謙二両先生にも永年にわたり多くの御教示、御助言を頂いた。また小川、入矢両先生ならびに佐伯富先生には、學位論文審査を擔當して頂き、御厚誼を賜わった。そのほか一々しるすに暇のないほど多くのすぐれた師友にかこまれて研究を進め得たことは、學究の徒としてこの上ない倖せであり、常々感謝の念を失わぬところであるが、この機會にあらためてそのすべての方々に深甚なる謝意を捧げたい。學恩に酬いるにはそれにふさわしい研究成果を以て應えるべきであり、本書の上梓も、何よりもまずそのような微意の表示にほかならぬといいたいのであるが、はかり知れぬ鴻恩に對し、あまりにもささやかな一書にすぎないことをかえりみて慚愧に堪えない。今後一層の精進を誓って、そのせめてもの補いとしたい。

おわりに、本書の出版については創文社の久保井理津男社長、大洞正典編集長および編集部小山光夫の諸氏の御盡力を頂き、また文部省の昭和五十年度研究成果刊行費補助金の給付を得た。更に索引の作製について、東北大學中國文學研究室の山口健治助手をはじめ多數の學生諸君の協力を頂いた。併せしるして感謝の意を表する。

一九七五年十二月十二日

旅中名古屋大學內宿所において

村上哲見識

目次

自序
緒言……三
序說……七
第一章　「詞」の語義と韻文樣式としての「詞」……七
第一節　「詞」字の原義および「詞」と「辭」……七
第二節　歌辭としての「詞」……一二
第三節　唐代における「詞」……一八
第四節　韻文樣式としての「詞」（北宋）……二一
第五節　南宋以後の「詞」……二九
第六節　結　語……三一
第二章　詩と詞……三五
第一節　問題點……三五
第二節　詩詞の常識的な區別……三七
第三節　晏殊「浣溪沙」詞句の例……三八
第四節　詩の理想――「格調」……四二

第五節　詩詞の差異……四五
第六節　文學様式と士君子の理念……四八
〔附考一〕詞の異稱について……五三
(a) 樂府、新樂府、近體樂府、寓聲樂府……五三
(b) 塡詞、倚聲、倚聲塡詞……五五
(c) 長短句……五八
(d) 樂　章……六〇
(e) 曲子詞、曲子、曲、歌曲……六三
(f) 詩　餘……六三
(g) 琴趣外篇、語業、綺語……六六

上篇　唐五代詞論

上篇　唐五代詞論……七一
第一章　詞源流考……七一
第一節　唐代における燕樂と樂府……七一
第二節　燕樂の歌辭……七六
第三節　中唐における詞……八〇
第二章　溫飛卿詞論……九七
第一節　溫飛卿詞の位置づけ……九七
第二節　溫飛卿の人物および經歷……一〇三
第三節　溫飛卿の詩……一〇八

第四節　溫飛卿の詞……一一九
第三章　五代詞論……一三一
第一節　「花間集」と蜀の詞……一三一
第二節　南唐における詞……一四九
〔附考二〕「雲謠集」小考……一六二
下篇　北宋詞論……一六九
第一章　綜　論……一六九
第一節　唐五代詞より宋詞への移行と北宋初期における詞……一六九
第二節　北宋中期、仁宗朝における詞の發展……一七四
第三節　北宋後期における詞……一八四
第二章　張子野詞論……一九四
第一節　張子野の經歷と著述……一九五
第二節　仁宗朝における詞牌……一九六
第三節　張子野詞の特色　その一（日常性）……一九九
第四節　張子野詞の特色　その二（賦的な詞）……二〇五
第五節　張子野詞の特色　その三（警句）……二〇八

第三章　柳耆卿詞論 …… 二一五
〔上〕柳耆卿詞の形態上の特色 …… 二一七
第一節　詞牌　その一（他の詞人との對比）…… 二一七
第二節　詞牌　その二（僻調）…… 二一八
第三節　詞牌　その三（同調異體）…… 二二三
第四節　句法　その一 …… 二二九
第五節　句法　その二（形式および意境との關係）…… 二三四
〔下〕柳耆卿の生涯とその詞 …… 二四四
第一節　耆卿の詞に對する評價と詞のテーマ …… 二四四
第二節　豔情の詞　その一（閨怨の詞）…… 二四八
第三節　豔情の詞　その二（男性の慕情を詠ずる詞）…… 二五四
第四節　豔情の詞　その三（合歡の詞）…… 二六〇
第五節　豔情の詞　その四（妓女を題詠する詞）…… 二六四
第六節　豔情の詞　その五（その特色と反響）…… 二六八
第七節　耆卿における「反逆」…… 二七三
第八節　羇旅の詞　その一（「宦情羇思」）…… 二七八
第九節　羇旅の詞　その二（悔恨と憂悶）…… 二八〇
第十節　羇旅の詞　その三（結語）…… 二八七
〔附考三〕柳耆卿家世閲歷考 …… 二九三

㈠ 閲歴 …… 二九四
㈡ 家世 …… 三〇五
第四章　蘇東坡詞論 …… 三一一
第一節　張子野と蘇東坡 …… 三一一
第二節　東坡の生涯とその詞風の轉變 …… 三一三
第三節　東坡詞の特色 …… 三一六
第四節　東坡詞の評價 …… 三二四
〔附考四〕東坡詞札記　その一 …… 三二九
㈠「菩薩蠻、回文四時閨怨」四首 …… 三三一
㈡「水龍吟、次韻章質夫楊花詞」 …… 三三五
〔附考五〕東坡詞札記　その二 …… 三四五
㈠ 初期の東坡詞 …… 三四七
㈡ 六客詞本事考 …… 三五〇
㈢ 悼亡詞 …… 三五八
㈣ 東坡詞と陶淵明 …… 三六一
第五章　周美成詞論 …… 三七〇
第一節　周美成の經歷と著述 …… 三七一
第二節　南宋における周美成詞の流行 …… 三七三
第三節　周美成詞に對する歷代の評價 …… 三七六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四節　周美成詞の特色　その一（格律、修辭）……三八〇
第五節　周美成詞の特色　その二（「渾厚和雅」）……三八九
第六節　周美成詞の特色　その三（「蘭陵王」、「瑞龍吟」の例）……三九五
第七節　周美成詞の特色　その四（「沈鬱頓挫」、「不説破」、「咽住」）……四〇五
第八節　詞の歴史における周美成詞の地位……四一二

附論一　望江南菩薩蠻小考……四一七
㈠　望江南小考……四一七
㈡　菩薩蠻小考……四二五

附論二　漁父詞考……四三一
㈠　唐五代における漁父詞……四三一
㈡　宋代における漁父詞……四四〇

附論三　霓裳羽衣曲考……四五四
㈠　成立について……四五五
㈡　梨園の存續期間について……四六三
㈢　中晩唐における霓裳曲……四六六
㈣　五代における霓裳曲……四七四
㈤　宋代における霓裳曲……四七七
㈥　姜白石「霓裳中序第一」の譯譜について……四八一

索　引……1～29

CONTENTS

Introduction

Prologue

Chapter Ⅰ Meaning of *Tz'u* 詞 and *Tz'u* 詞 as a Verseform 7

Chapter Ⅱ *Shih* 詩 and *Tz'u* 詞 35

Note 1 Synonymous Terms of *Tz'u* 詞 52

Part One: *Tz'u* 詞 in *T'ang* and *Wu-tai* 唐五代 Periods

Chapter Ⅰ Origin of *Tz'u* 詞 71

Chapter Ⅱ *Tz'u* 詞 by *Wen Fei-ch'ing* 溫飛卿 97

Chapter Ⅲ *Tz'u* 詞 in *Wu-tai* 五代 Period 132

Note 2 On *Yün-yao-chi* 雲謠集 162

Part Two: *Tz'u* 詞 in Nothern-*Sung* 北宋 Period

Chapter Ⅰ General Outline.. 169

Chapter Ⅱ *Tz'u* 詞 by *Chang Tzu-yeh* 張子野 194

Chapter Ⅲ *Tz'u* 詞 by *Liu Ch'i-ch'ing* 柳耆卿 215

Note 3 On Genealogy of Liu Family 柳氏 and Career of Liu Ch'i-ch'ing 柳耆卿... 293

Chapter Ⅳ *Tz'u* 詞 by *Su Tung-p'o* 蘇東坡.. 311

Note 4 On *Tung-p'o's Tz'u* 東坡詞（Ⅰ）.. 329

Note 5 On *Tung-p'o's Tz'u* 東坡詞（Ⅱ）.. 345

Chapter Ⅴ *Tz'u* 詞 by *Chou Mei-ch'eng* 周美成.................................. 370

Appendix Ⅰ On *Wang-chiang-nan* 望江南 and *P'u-sa-man* 菩薩蠻 417

Appendix Ⅱ On *Yü-fu-Tz'u* 漁父詞 431

Appendix Ⅲ On *Ni-shang-yü-i-ch'ü* 霓裳羽衣曲................................. 454

Index... *1~29*

宋詞研究

唐五代北宋篇

緒　言

ここに「詞」と稱するのは、唐代に源を發し、宋代の間に、歌辭文藝として大いに流行したところの韻文様式を指す。それは唐の早い時期においては、即興的な、あるいは素朴な歌謠の辭にすぎなかったが、唐末より五代の間に、次第に獨特の文藝性を帶びるようになり、南北兩宋においては、一の抒情的韻文様式として獨自の地歩を占めるに至った。中國における各時代の傑出した文學様式を列擧して、「漢文、唐詩、宋詞、元曲」ということが明代あたりから言い慣わされているが、「詞」は、漢の文、唐の詩、元の曲のごとく、宋代において頂峰を極め、他の時代の比肩を許さないところの文學様式なのである。

本書の內容は必ずしも「宋代の詞」に限定されるものではなく、ひろく「詞」なる様式全般に及ぶところが少なくないが、「詞」を論ずる限り歸着するところは「宋詞」に在ると思うので、總題はあえて「宋詞研究」と稱することにした。

本書は序說、上篇、下篇、附論の四部より成る。「詞」は抒情を主とする韻文様式であり、現今よりみれば、抒情詩の一種といってもさしつかえなく、中國の古典文學における抒情詩の重要な一部を形成するものということができる。從って古體や近體の「詩」(日本でいうところの漢詩)と、根底において通ずるところがあり、現象的にもさまざまな交錯があるが、それにもかかわらず、中國における傳統的な文學の認識の中では、それは獨

立した韻文様式として「詩」とは區別されていた。ところが、逆にそれらがどのように區別されるのか、またなぜ區別されねばならなかったかを考えてみると、自明のことのようでありながらなかなか簡單ではない。一般にある文學様式を理念的に定義づけるのは容易なことではあるまいが、ことに「詞」の場合は、他の韻文様式、なかんずく近親關係にある「詩」との對比において一層の困難がある。しかしながら、この「詞」なる様式の全體像を把握し、かつその本質を見極めようとするならば、右の問題を曖昧なままに放置しておくわけにはいかない。本書の序說は、この〃「詞」とは何か〃という原初的な、またそれだけに重要な問題に對して私なりのアプローチを試みたものである。もとより全面的に解明し盡くしたとは思わないが、從來の研究に比すれば、ある程度その輪郭を明らかにし得たと思う。つぎに上下の二篇は、唐代におけるこの様式の濫觴より、北宋末に至って充分に成熟を遂げるまでの發展の過程を歴史的に考察し、かつそのさまざまな要因を解明しようとするものである。まず上篇は唐五代詞論とし、唐代に發生した新興の歌辭形式が、唐末の溫庭筠（溫飛卿）を經て五代に至る間に、しだいに獨自の文藝性を備え、韻文文學の一種として成長して行く經緯を論ずる。いわば宋詞前史である。下篇は北宋詞論とし、この時期に「詞」は一の韻文様式としての地位を確立し、かつその末期に至って成熟の段階に達することを論ずるが、はじめに北宋一代における「詞」の發展の概略を初期、中期、後期の三段階に分って述べ、ついでこの時代における「詞」の展開の諸相を代表し、かつこの様式の發展に重要な契機をもたらした詞人として、張先、柳永、蘇軾、周邦彥の四人を重點的に採り上げることにする。ことに「詞」は北宋末の周邦彥に至って、韻文様式として成熟を極めたといい得るのであって、本書はここを以て完結する。ただそれは、以後の南宋の詞を無視する意ではなく、南宋におけるこの様式の更なる展開の諸相を明らかにすることは將來に期したい。總題に「唐五代北宋篇」と添える所以である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com